なごや文化情報

2024
Spring

No.409
NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery／STANDING PINE
特集／2023　1年をふりかえって
令和5年度 名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞
#zoom up／株式会社コノハ美術 代表 池田ちかさん

公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2024
Spring

表紙

「無陵硯（むりょうけん）」

（2007年／H22.5㎝×W15.0㎝×D6.0㎝／鳳鳴石《石材》）

古、日本には漢字と共に唐様式の唐硯が伝えられた。私は、かな文字の優美なフォルムに魅せられ、独自の造形力で和様式の硯の完成を目指してきた。文房具としてのみならず、彫刻的作品として、今を生きる人々の『心の器』となるよう作硯している。

五代 名倉鳳山（ごだい なぐらほうざん）（利幸（としゆき））

1977年　東京藝術大学美術学部彫刻科卒業
1997年　第44回日本伝統工芸展日本工芸会奨励賞受賞
　　文化庁買上・東京国立博物館蔵
1999年　第21回都市文化奨励賞受賞
2003年　愛知県芸術文化選奨文化賞受賞
2015年　愛知県立旭丘高等学校第38回鯱光会顕彰受賞
ウェブサイト　https://www.nagura-hozan.com

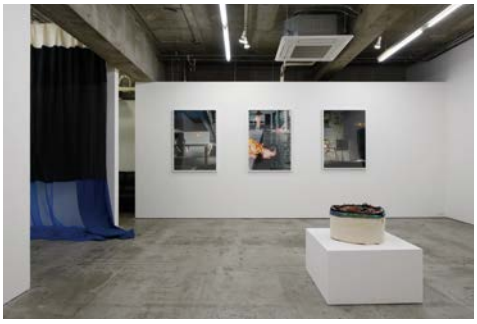
Contents

Pick Up Gallery　STANDING PINE…… 2
2023　1年をふりかえって…… 3
令和5年度　名古屋市芸術賞…… 8
令和5年度　名古屋市民芸術祭賞…… 9
＃zoom up　株式会社コノハ美術 代表 池田ちかさん…… 10

「なごや文化情報」編集委員
杵屋六春（長唄・唄方 名古屋音楽大学講師）
桐山健一（舞踊・演劇ジャーナリスト）
黒田杏子（ON READING）
鈴木敏春（美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事）
濵津清仁（指揮者）
望月勝美（編集者・ライター）

Pick Up Gallery

STANDING PINE（スタンディングパイン）



グループ展　Dear Summer（2021年7月3日）

STANDING PINEは、2009年名古屋にオープンして以来、ペインティングや立体の他、写真や映像、キネティックアート、テキスタイルなど、様々なメディアを扱う国内外のアーティストを紹介し続けている。国際的なアートフェアやプロジェクトなどに積極的に参加し、日本の優れた才能あるアーティストを幅広い観客に向けて発信すると同時に、国際的評価の高い海外のアーティストをアジアのアートシーンに紹介している。多様化していく世界のアートシーンに常に着目し、近年ではアフリカ現代美術にも力を入れ、日本では未だ紹介される機会の少ない優れたアーティストの活動を発信している。

設　立　2009年　支配人　立松 武
住　所　〒460-0003　愛知県名古屋市中区錦2丁目5-24えびすビル Part2 3F
電　話　052-203-3930

取り扱い作家　平川典俊、ジョエル・アンドリアノメアリソア、杉山健司、intext、平川祐樹、ペ・ラン、アブドゥライ・コナテ、ジャンフランコ・ザッペティーニ　ほか
ウェブサイト　https://standingpine.jp

2023 1年をふりかえって

洋　舞　上野茂（ナゴヤ劇場ジャーナル編集長）

例年、東海地区の洋舞界はBALLET・NEXTの公演で幕を開ける。2023年は芸術監督・市川透（脚本、演出、振付）による「Swan Lake」。名作「白鳥の湖」の幻想世界を背景に、恋人を亡くし苦悩する青年の心理を視覚的に描出した、市川ならではの創作バレエ。野々山亮、山本恵里菜が主役を務めた（1月22日・刈谷市総合文化センター）。

コンテンポラリーでは、現代舞踊協会中部支部が市文化振興事業団との共催で「親愛なるMother Earth」を行った。出演したのは夜久ゆかり、こかチちかこ、石川雅実、石原弘恵が率いる4組。同じカテゴリーに属する4組だが、作品の志向は大きく異なった。制約のない現代舞踊の面白さと多面性を満喫した（1月28～29日・千種文化小劇場）。

石川雅実 振付「雨の女、土の声」（撮影：東海フォトDC）

塚本洋子テアトル・ド・バレエカンパニー出身で新国立劇場バレエ団のプリンシパルを務める米沢唯が帰郷。愛知県芸術劇場とDance Base Yokohamaが共催したコンテンポラリー「Rain」に主演した。米沢は、制作陣が練り上げた心理ドラマと一体化し、サマセット・モームの世界観を描出した（3月11～12日・愛知県芸術劇場小ホール）。

東海地区23のバレエ団で構成する日本バレエ協会中部支部。23年は「シンデレラ」を上演した。松岡伶子の原振付、松岡璃映と市橋万樹の再振付で、池下みのり（ステップ・ワークスバレエ）がタイトルロールに抜擢された。よく整理された明瞭簡潔な演出。ダンサーたちは繊細かつ躍動的なパフォーマンスで夢物語を成立させた（3月19日・市民会館フォレストホール）。

日本を代表するスターダンサーと、東海地区のアマチュアダンサー、振付家が共演する「グラン・ドリーム・バレエ・フェス」（東海テレビ主催）。今年は上野水香、倉永美沙、中村祥子、近藤亜香（名古屋市出身）らが来演。地元63のバレエ団から選抜されたダンサー173人が晴れの舞台を披露した（10月8～9日・愛知県芸術劇場大ホール）。

コロナ禍で延期されていた新国立劇場バレエ団の愛知初公演「ドン・キホーテ」には、前出の米沢唯が主役として出演した。技術、表現力、ダンサー個々の意識の高さ…、日本バレエ界の最高峰ならではのステージは圧巻。満場の観客はスタンディングオベーションで応えた（11月3～4日・愛知県芸術劇場大ホール）。

秋には地元の大手バレエ団が本公演を行った（会場はいずれも愛知県芸術劇場大ホール）。越智インターナショナルバレエは「海賊」を上演（11月11日）。ワディム・ソロマハを中心にした男性ダンサーのダイナミックな演技で魅了した。塚本洋子テアトル・ド・バレエカンパニーは深川秀夫と遠藤康行によるコンテンポラリー2本立て。実力本位のオーディションシステムを採用したキャスティングで眩いロマンの世界を表出（11月16日）。松岡伶子バレエ団は、主作品の「ジゼル」で悲しくも美しい幻想世界を演劇性豊かに描き上げた（12月10日）。

新国立劇場バレエ団「ドン・キホーテ」（撮影：中川幸作）

演　劇　小島祐未子（編集者・ライター）

少年王者舘の天野天街が複数の舞台を演出する中、圧倒的な出来栄えだったのが「りすん」。芥川賞作家・諏訪哲史の小説を天野の脚本・演出で舞台化した「りすん」は2010年の初演でも反響を呼んだが、新キャストで再創作した今回、脚本はほぼ変わっていないのに後味が大きく異なり驚いた。

主人公は病床にいる朝子と、兄妹同然に育った隆志。原作は「小説とは何か」を問うメタフィクションなので、二人の会話を盗み聞き、書き記す＝作品化している存在が浮かび上がってくると、天野一流のメタ演劇の濃度も増していく。終幕、朝子は病室＝舞台を飛び出して客席に出現！それは死からの逃走であり作品からの逃走だと見た。一方、隆志が舞台に取り残される姿も印象深い。彼は諏訪の分身であろうが、作者の諏訪が自ら仕掛けた作意の檻に放り込まれたようで、その反転の構図が恐ろしかったのだ。

刈馬演劇設計社「フリーハンド」は表現の自由を主題とする意欲作だった。刈馬カオスは常に社会性の高い題材と果敢に向き合ってきたが、同作は彼にとって最も切実な問題だったはず。ところが、今までにないほど筆が軽妙で、時にユーモラス。創作への政治的介入と演劇祭の実現を巡る物語は、結末の読めない上

質な会話劇に仕上がっていた。

喜劇のヒロイン、劇団サカナデ、老若男女未来学園という若手劇団による合同公演「吉報vol.1『こぼす』」は予想を上回る収穫があった。3編それぞれの異なる作家性に魅了され、俳優陣も達者。今後も追いかけたいと思わされた。

地域公共劇場連携事業「りすん」
（9月17日～18日　三重県文化会館小ホール
9月23日～24日　名古屋市千種文化小劇場）

そして、名古屋はもちろん日本を代表する劇作家、北村想に様々な感情を抱いた1年。まず、北村の新作を定期的に上演してきたavecビーズが最終公演を敢行。大規模なプロデュース公演「ケンジトシ」「シラの恋文」で全国的にも話題を集めた北村だが、avecビーズでは小劇場らしい実験性を見せてきただけに淋しい。ただ、演出家の加藤智宏が北村の未発表戯曲を発掘し、上演したperky pat presents26「白い砂の少女」は、思いがけない出会いでもあり興奮した。

劇中には天文学や数学、少年少女、テキ屋…など北村らしい要素にあふれ、それらが小難しいやり取りやナンセンスな掛け合い、ひどい下ネタ、詩的なフレーズとなって乱反射する。今になってみると、防災や戦争にまつわる会話は予言めいた意味でも怖い。そんな世界を加藤は、円形舞台とパラソル1本のみの美術で象徴。極めてシンプルな空間に北村の言葉を浮遊させた。また4人の俳優も抑制の効いた演技で役柄と対峙。キャスト、スタッフそれぞれの作業に潔さのような美が宿り、不思議な感覚で満たされた。

23年は中区にメニコン シアターAoiが開場。東西の劇団や話題作が次々とやってきた。その一環で「ナビイチリーディング×シアターAoi」が行われたのは重要。これは日本劇作家協会東海支部の育成プログラムを通じて両者が組んだ公演で、同劇場が鑑賞事業にとどまらず、当地の演劇文化の発展にも寄与していく姿勢がうかがえた。

perky pat presents26「白い砂の少女」
（11月23日～26日　七ツ寺共同スタジオ）

洋　楽　早川立大（音楽ジャーナリスト）

初冬の風物詩として親しまれてきた「市民の『第九』コンサート」が「ファイナル演奏会」を迎えた。オーディションで選ばれた約260人の特別合唱団、4人の独唱者、下野竜也指揮の名古屋フィルハーモニー交響楽団（以下、名フィル）が最終回に相応しい白熱の演奏を繰り広げた。名古屋市制百周年を記念して1989年に「ザ・第九」1万人のコンサートとしてスタートし、その後名称や組織を変えつつほぼ毎年開催され、今回で32回。その「生みの親」「育ての親」的な存在であり続けた大黒柱・藤井知昭さんが3月に逝去したことは「ファイナル」にとり象徴的だ。

市民の「第九」コンサート2023ファイナル演奏会
（11月26日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール）

［声楽］オペラでは、上田久美子の奇抜な演出が話題を呼んだ愛知県芸術劇場（以下、県芸）主催の「道化師」「田舎騎士道」（3月3日、5日、県芸大ホール）、名古屋二期会が全力で取り組んだ「カルメン」（10月14日～15日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール）が挙げられるが、総じて公的助成金が減って青息吐息。そんな中、三河市民オペラ制作委員会のジョルダーノ「アンドレア・シェニエ」（5月6日～7日、アイプラザ豊橋）が企画力、集客力、公演水準の点で群を抜く成果を上げた。

［器楽］名古屋市に本拠を置く名フィル、セントラル愛知交響楽団、愛知室内オーケストラ（以下、ACO）が精力的な活動を続けた。中でも創立40周年となる2023年のシーズンをブラームスの交響管弦楽作品に充てたセントラル愛知響が、毎回多彩な指揮者、ソリストにより目覚ましい演奏ぶり。第198回定期公演では、ピアノ協奏曲第1番の独奏者に迎えた名手小山実稚恵が常任指揮者角田鋼亮率いるオーケストラとともに類稀な名演奏を展開した（7月9日、三井住友海上しらかわホール）。名フィルは正指揮者の川瀬賢太郎が4月から音楽監督に就任。就任記念公演ではハイドンの交響曲第86番とマーラーの交響曲第5番を指揮して多才ぶりを披露した（4月7日～8日、県芸コンサートホール）。

リサイタルでは没後60年となるプーランクの作品を取り上げた中堅鈴村真貴子を挙げたい。プーランクの研究解釈両面で屈指の彼女だけに「夜想曲集」や「ナゼルの夕べ」で絶妙の演奏ぶりだった。

鈴村真貴子ピアノリサイタル
（10月17日、電気文化会館ザ・コンサートホール）

田村響はベートーヴェン、ショパンらの作品を取り上げた2回のピアノ・リサイタル（5月21日、電気文化会館ザ・コンサートホール、9月24日、宗次ホール）や、ACOとのモーツァルトのピアノ協奏曲第21番（2月17日、三井住友海上しらかわホール）で大家の風格を見せた。シューマンの室内楽作品全曲演奏に挑戦中の室内楽集団レーベインムジークは第2回から4回までを好調にこなし、並行してブーランクの室内楽作品全曲演奏の2回目も終えた（2月25日、6月17日、8月8日、3月30日、電気文化会館ザ・コンサートホール）。その旺盛な活動から目が離せない。

能　楽　飯塚恵理人（椙山女学園大学教授）

2023年に鑑賞した名古屋能楽堂の舞台から印象に残ったものをいくつか取り上げる。

「名古屋能楽堂正月特別公演」（1月3日）の久田三津子〈楊貴妃 台留〉。抑えた調子ながら口跡よく響く謡が、玄宗への思慕と現在の淋しさを表現しており素晴らしかった。舞も規矩正しく美しかった。

「名古屋能楽堂三月特別公演」（3月5日）は久田勘鷗の〈求塚〉。若女の面をかけた前シテ菜摘女にふさわしい清純さが、思いつめた心情を語るシテ謡にしっかり表現されていた。後場では地獄の責め苦に遭う場面など美しい型でありながら責めの苦しみを表現し、詩劇としての能になっていた。名古屋の重鎮としての久田勘鷗の健在を示した好演であった。

名古屋宝生会「桃華能」（3月19日）に和久荘太郎の〈春日龍神〉が出た。ワキ明恵上人の飯冨雅介はいつもながら口跡良く、信仰心の篤い僧侶ぶり。前シテ宮人の和久荘太郎も口跡よく厳かで強く、明恵の入唐を止めたい春日明神の神慮を伝える者としての説得力にあふれていた。

令和5年度第1回目の「青陽会研究能」（4月9日）は吉沢旭の〈東北〉。前後ともに和泉式部の化身にふさわしい雅やかで美しい姿だった。吉沢の魅力は師匠の泉嘉夫師に鍛えられた謡の確かさにあり、前場のシテ謡など特に良かった。

シテ方の観世喜正、大鼓方の河村眞之介、小鼓方の後藤嘉津幸、笛方の竹市学の会である「能の旅人」も第17回を迎えた（6月24日）。今回は珍しい小書がついた〈三輪　白式神神楽〉。後シテの観世喜正は白一色の装束で女神らしい清らな姿だった。眼目はやはり神楽で、身体の切れが良い上に美しく上品であった。メンバーに前川光長の太鼓を加えた名手揃いの囃子が素晴らしかった。

11月5日の「名古屋金春会」の〈融（とおる） 笏ノ舞〉。前シテは本田光洋、後シテは本田布由樹。前シテ老翁は「常のよりも白くお公家さんにふさわしいかと」いう天下一大和の焼印がある三光尉の面をかけていたが、さすがに融の大臣の化身にふさわしい上品な顔立ちであった。また特に「名所教え」のシテ謡が月と名所に在世を偲ぶ融の心情を美しく描いた。後シテの布由樹は早舞ではなく急之舞を舞ったが、颯爽とした貴公子らしさが佳かった。前シテは謡に、後シテは舞に日頃の研鑽の成果が発揮された好演であった。

「名古屋金春会」《融 笏ノ舞》
（撮影：国東薫）

「復曲能を観る会」の名古屋公演（12月16日）では〈大磯〉が上演された。ワキ僧の安田登は雪の中の旅を風雅に和歌的に謡で表現した。前シテ虎御前の化身の女の加藤眞悟は死後も残る曽我祐成への思慕を切なく感じさせた。

名古屋能楽堂は2024年4月から10月末まで改修工事のため閉館する。またそれと入れ替わるように豊田市能楽堂でも2025年4月1日から26年6月1日までの改修工事が予定されており、これからの公演のあり方は大きく変わるだろう。良い方向に向かうことを期待している。

「復曲能を観る会」《大磯》
（撮影：新宮夕海）

邦楽・邦舞　北島徹也（CBCテレビ 調査役・金沢大学共同研究員）

一斉に会場取りに奔走、秋には百花斉放の公演数となったのも、コロナ禍ようやくの収束のおかげである。

西川流家元 西川千雅は昨年に引き続き名古屋市公会堂での『名古屋をどりNEO 傾奇者』（10月21日～22日）、ゲストに友

近を迎え、「名古屋からくり事件簿」と題して明治時代の博覧会と安珍清姫に軸を置いた乱歩の推理劇に仕立て、名古屋演劇ペンクラブ賞を得た。

同じく名古屋演劇ペンクラブ賞を得たのは五條園美。主宰する「芸能集団 創の会」の公演『幻想 平家物語』（6月3日～4日、名古屋市芸術創造センター　以下、「芸創」）のジャンルを超えた創造が舞踊劇の新たな可能性を示すものとして評価された。

創作舞踊劇『幻想 平家物語』

五條園美は「やっとかめ文化祭」の『日本舞踊×バレエ公演』（11月11日、芸創）でも、洋舞とのコラボに尽力した。こうした創造のDNAは弟子にも受け継がれ『五條園小美リサイタル』（10月20日、北文化小劇場）では2つの創作に挑んだ。

西川流は『長寿乃會』（5月20日、日本特殊陶業市民会館　以下、「市民会館」ビレッジホール）、鯉娘が「鐘ヶ岬」を舞った30周年となる『ふたり華』（9月30日、市民会館ビレッジホール）、『よし乃会』（11月19日、芸創）。

花柳流では花柳朱実が振り付けた「雪の降る街を」が印象に残る『朱ざくら会』（8月9日、芸創）、花柳磐優は『美優会』（11月11日、名古屋能楽堂）で「紀州道成寺」を舞い、卒寿の花柳寿江女が『寿江女会』（10月8日、市民会館ビレッジホール）を催した。

内田流は『るり千鶴会』（8月10日、名古屋能楽堂）で会主が「松の名所」を舞い、『創立70周年記念公演』（10月14日～15日、市民会館ビレッジホール）では家元 内田有美ほかで雄大な「富士」を見せた。

赤堀流家元 赤堀加鶴繪は『赤堀会』（5月5日、市民会館ビレッジホール）で「広重八景」、また創作「陽喜踊」で不思議な世界を垣間見せた。瑞鳳流家元 瑞鳳澄依は「芸術鑑賞会」（8月27日、名古屋市公会堂）で「正札附」、自らのリサイタル（10月15日、北文化小劇場）の「影法師」と硬軟ともに仕上げた。

珍しい公演では玉城流 琉球舞踊『山川昭子独演会』（10月15日、芸創）で、「かせかけ」「諸屯」などの古典舞踊に加えて創作舞踊も上演、「技芸賞」として名古屋市民芸術祭特別賞を得た。

長唄は『名古屋長唄大会』（2月19日、芸創）のほか、杵屋勝桃・勝千華が『桃華の会』（5月14日、天白文化小劇場）で「杵勝三伝 虎狩」を演奏し、杵屋三太郎は主宰の『杵三会』（10月8日～9日、名古屋能楽堂地下稽古室）、昨年作曲した「恋の熱田めぐり」（安田文吉作詞）を立方も加え熱田神宮祈祷殿で、華やかに奉納演奏（10月22日）した。

杵屋六秋・六春は『秋栄会』『おやこ会』（11月11日、今池ガスホール）で梅を主題とした2曲を演奏。

三曲では『別所知佳 箏・三絃リサイタルー想いー』（11月30日、三井住友海上しらかわホール）で「ゆき」ほか古典曲4曲に挑んだ。

『恋の熱田めぐり』奉納演奏

長年、名古屋の伝統芸能を支えてきた〝旦那衆〟の会である「邦楽 名吟会」が60回にあたる公演（11月26日、御園座）を以て最終公演となったのは非常に残念なことであるが、未来を担う世代が古典芸能に親しんでもらうきっかけ作りの試みの一環として、中区の正木小学校で『伝統芸能鑑賞会』（12月13日）が催され、杵屋三太郎が三味線の説明、さまざまな表現、杵屋六秋・六春らの長唄演奏での日本舞踊「藤娘」を市議でもある西川千寿鼓が舞った。大いにこうした活動を広げてもらい〝芸どころ〟の再興を図りたい。

美　術　高橋綾子（美術評論家・名古屋造形大学教授）

70年ぶりに改正された博物館法が2023年4月から施行、前年の国際博物館会議（ICOM）総会では、約15年ぶりに「ミュージアム」の定義が改正された。我が国の博物館には、文化観光やまちづくりへの貢献が求められ、国際的には包摂的であるとともに多様性と持続可能性を育む場であることが強調された。2023年はミュージアムの曲がり角として、美術館の活動も少なからずその影響下にあったといえよう。

こうした国内外の要請に対して、愛知県美術館は美術という枠組みや地域の文化環境に対峙して、地道な調査研究と卓越した編集力で応答した。「近代日本の視覚開化 明治―呼応し合う西洋と日本のイメージ」と「幻の愛知県博物館」という渋いラインナップは、さながら「読む」展示でもあり、歴史再考への矜持とアーカイブへの真摯な態度が際立った。国際芸術祭地域展開事業「なめらかでないしぐさ現代美術in 西尾」は、作品とのマッチングで地域資源への再発見を誘いつつ、地元の人々との気負いのない運営に好感を持った。

「幻の愛知県博物館」　展示室入り口に実物大のハリボテ金鯱が鎮座した（提供：愛知県美術館）

開館35周年の名古屋市美術館は、「コレクションの20世紀」で全出品作品を年代順に紹介。さらに市民からの募金によって2022年から始動した「東山動物園猛獣画廊壁画修復プロジェクト」は、愛知県立芸術大学文化財保存修復研究所によって人材育成を図りつつ作業が公開されたことは出色で、美術館のあらたな可能性を拓いたと言える。

コレクションの充実という本分を示唆したのは、開館15周年の碧南市藤井達吉現代美術館リニューアル記念展「碧い海の宝箱

「東山動物園猛獣画廊壁画修復プロジェクト」での公開修復作業
（提供：名古屋市美術館）

一達吉からはばたく未来―」。地元作家の個展では、一宮市三岸節子記念美術館「安藤正子展 ゆくかは」と清須市はるひ美術館「栗木義夫CULTIVATION―耕す彫刻」が、時季を得た丁寧な展観であった。

エッジの効いた現代美術では、豊田市美術館の「ねこのほそ道」と「吹けば風」。コレクション企画展「枠と波」や「歿後20年若林奮」の充実にも感嘆した。さらに愛知県美術館・豊田市美術館 同時期開催コレクション展「徳冨満――テーブルの上の宇宙」が注目された。2001年に35歳で早逝した徳冨満の作品が、鮮新な強度をもって日の目をみたことは喜ばしく、意味のあることだと得心した。しかるべき作品調査を経て美術館に収蔵、アーカイブされることの内実にこそ、ミュージアムの核心があるからだ。

愛知県ゆかりの美術家として、現役でたゆまぬ創作活動を展開されていた森真吾さんが86歳で、桑山忠明さんが91歳で亡くなられた報に触れ、心から哀悼の意を表したい。そして「あいち2022」ラーニングプログラムで新局面を披露していた徳重道朗さんが、51歳の若さで急逝されたことは痛恨の極みだった。2001年に名古屋市民ギャラリー矢田のオープニング企画展での仮想的で飄々とした作風は思い出深く、近年のリサーチ型からの展開が大いに期待された矢先。批評家やミュージアムによる調査研究が、徳重さんの存在と作品への再考を促すことに期待したい。

文　学　清水良典（文芸評論家・愛知淑徳大学教授）

2023年の中部ペンクラブ文学賞は、長年熊野を拠点に作家活動を続けてきた中田重顕の『悪名の女』が圧倒的な存在感を示して満票で受賞した。熊野山中の林業労働者のための山小屋で寝泊まりして炊事をする「カシキ」を務めた女性の一代記である。幼いころ、旧満州で侵攻してきたロシア兵に日本人女性が暴行される現場に立ち会ったことが彼女のその後の人生を狂わせた。しかもその悲劇は、自警団長を務める父がロシア軍に守護してもらうために差し出した人身御供だった。女性の性的受難というだけでなく、国家間戦争の政治的な犠牲という側面が明らかとなる。差別や偏見を受け続けた88歳になる女性の過酷な人生を、文学的な尊厳の光で照らした秀作といえよう。これまで戦争の犠牲者や大逆事件に関わった無名の民衆を取り上げてきた中田の集大成というべき作品だった。

また雑誌『追伸』で連載されていた劉永昇のルポルタージュ『関東大震災朝鮮人虐殺を読む』（亜紀書房）が刊行された。タイトルに「読む」とあるだけに、同時代の作家や各紙誌の記事をつぶさに取り上げ、冷徹に読み解いた労作である。井戸に毒を入れたといった在日朝鮮人へのデマや中傷を共有した日本人が「正当防衛」意識を作り上げ、白昼堂々と虐殺を遂行した「合理化と受容」の心理的な経緯だけでなく、彼らの潜在意識の「イド」の怪物が噴き出た背景を明らかにする。さらに近年もまた同様のデマが飛び交う日本の残念な現実を付け加える。日韓・日朝関係が冷え込むなか、今後も著者の活躍は続きそうである。

毎年のように紹介してきた吉川トリコの長編小説『あわのまにまに』（KADOKAWA）は、著しい著者の成長を告げる力作であった。近未来の2029年から10年ずつ、1979年まで遡っていくという構成の試みによって、仲の良い二組の家族の封印されてきた秘密が徐々に明かされていく。そこには表向きには「ふつう」の家庭生活を作り上げながら、同性への愛をいびつな形で貫いてきた複数の人生があった。友情と愛情のあわいとねじれが、複雑なパズルのように組み込まれたハードルの高い小説である。読者にとってもハードルは高そうだが、読む歓びを味わうことができる。

2024年のNHK大河ドラマ「光る君へ」では紫式部が描かれているが、奥山景布子の『ワケあり式部とおつかれ道長』（中央公論新社）は、式部がママであるバーを舞台に、式部や道長だけでなく、花山天皇や清少納言などゆかりの人物たちが次々に登場して、裏話を披露する痛快なエンターテインメントである。また『フェミニスト紫式部の生活と意見』（集英社）は、保守的な古典文学研究の世界で悩みながら博士号をとった著者の、フェミニズムからの本音の発言が存分に盛り込まれている。

『関東大震災朝鮮人虐殺を読む』劉永昇
亜紀書房

『あわのまにまに』吉川 トリコ
KADOKAWA

令和5年度 名古屋市芸術賞

令和5年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特賞

劇団うりんこ 【演劇】

1973年、東海地方で初めて児童劇専門のプロ劇団として設立。以降50年にわたり、国内外の芸術家と協働して多数の演劇を制作し、うりんこ劇場はじめ、全国の劇場や会館・小中高等学校の体育館・地域の公民館などで上演。

また、演劇ワークショップや学芸会支援のほか、企業におけるコミュニケーション教育事業や乳幼児と保護者対象のワークショップ、教員や教職課程学生へのコミュニケーション研修なども広く展開。うりんこ劇場は地域住民にも活用され、子育て支援サークルなど地域コミュニティーの活性化にも貢献。名古屋市芸術奨励賞や愛知県芸術文化選奨などを受賞。

2023年は創立50周年にあたる。こうした長年にわたる活動は当地域の文化芸術の振興に大きな役割を果たしており、その功績は多大である。

芸術奨励賞

奥村理恵 【音楽(ピアノ)】

名古屋市立菊里高等学校音楽科を経て、東京藝術大学へ進学。同大学院音楽研究科修士課程修了。学部在学中、安宅賞受賞。同大学院においてクロイツァー賞、ドコモ賞受賞。その後、ベルリン芸術大学、同大学院演奏家コース修了。

2006年、「演連コンサートNAGOYA」にてリサイタルを行う。その後もリサイタルや多くのコンサートに出演。ソロ、室内楽、伴奏者として舞台に立つ。

2009年には名古屋音楽ペンクラブ賞を受賞し、その後も多数の賞を受賞。また、東京藝術大学音楽学部管弦楽研究部、"Das Sinfonie Orchester Berlin"、名古屋フィルハーモニー交響楽団との共演や、メディア出演など活動を行う。

後進の育成にも取り組んでおり、第31回日本クラシック音楽コンクール全国大会では優秀指導者賞を受賞。多くのコンクールの審査員も務めており、さらなる今後の活躍が期待される。

米沢唯 【舞踊(バレエ)】

Photo by Yumiko Inoue

2006年、サンノゼバレエ団に入団。2010年にはソリストとして新国立劇場バレエ団に入団。2011年にはビントレー「パゴダの王子」で初主役を務める。2013年にはプリンシパルに昇格。

繊細な動きと表現力に定評があり、古典作品の主役のほか、「不思議の国のアリス」のアリスなどを踊り、持ち前のダンス力、表現力で多くの観客を魅了している。

2004年、全国舞踊コンクールジュニアの部第1位、ヴァルナ国際バレエコンクールジュニア部門第1位。2005年、世界バレエ&モダンダンスコンクール第3位。その後も芸術選奨文部科学大臣新人賞、愛知県芸術文化選奨文化賞、芸術選奨文部科学大臣賞など、多数受賞。

多くの市民に感動、夢を与え、市民の芸術文化の向上、バレエ界の発展に大きく寄与するなど、さらなる今後の活躍が期待される。

橋本宰 【伝統芸能(能楽)】

1992年、当時宗家預かりであった故西村欽也師最後の弟子として入門し、1993年には「花筐」ワキツレにて初舞台。その後、十四世宗家 高安勝久師、飯冨雅介師に師事。主に現師匠である飯冨雅介師より尾張藩お抱えであった能楽脇方高安流西村家に伝わる芸の指導を受け、東海地方を中心に関東、関西、広島、九州においても活動を行う。

また、小中学生への普及公演にも参加。名古屋能楽堂小中学生鑑賞会をはじめ、文化庁による「特別巡回公演」でも愛知県のみならず他県の小学校にも赴き子どもたちへの能楽普及の一助として活動。

また、稽古場を中区大須に二十数年間構え、地元との繋がりを大切にしつつ芸の研鑽に励む。

2020年には重要無形文化財総合指定保持者認定をされており、さらなる活躍が期待される。

名古屋市民芸術祭2023 名古屋市民芸術祭賞

名古屋市民芸術祭は総合的な芸術の祭典として、毎年10月、11月に開催しています。今年度は参加20公演（音楽7、演劇5、舞踊3、伝統芸能5）の中から部門ごとに、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に値する公演に「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭賞（2公演）

【音楽部門】

第24回名古屋混声合唱団演奏会

●11月5日（日）　●三井住友海上しらかわホール

バランス良くきれいにまとまり、特に男声が充実した混声合唱のハーモニーを楽しめた。親しみやすい曲で聴衆の心をつかみ、宗教曲へとつなぎ、日本人作曲家の硬派な作品から、親しみやすいジャズテイストの曲集で締めくくるという流れのプログラム構成が秀逸だった。小気味よくトークを交える指揮のもと、全身で歌う喜びを表現する合唱が聴衆を包み、幸せに満たされる演奏会だった。

【伝統芸能部門】

第八回 逢の会

●11月23日（木・祝）　●名古屋能楽堂

大曲「道成寺」を衣斐愛が見事に披（ひら）き、颯爽とした舞などの技量もさることながら、並々ならぬ気迫に満ちた舞台だった。名古屋地域の宝生流を支える親子三世代の共演が、芸の継承の気概を強く感じさせた。狂言方、囃子方にはベテランとともに若手の人材を起用するなど、次世代への芸の継承の意志が強く伝わるとともに、小中学生の入場料に特別価格を設定するなど、能楽を普及・振興するというまっすぐな姿勢に好感の持てる公演だった。

名古屋市民芸術祭特別賞（5公演）

【音楽部門】（クリエイティブ企画賞）

ニンフェアール第19回公演「リゲティへのオマージュ～究極のDuo:トランペットとチェロ～」

●11月24日（金）　●愛知県芸術劇場　中リハーサル室

難解だと思われがちな現代音楽をカジュアルに楽しむことができる創意工夫が随所に凝らされており、長らく現代音楽に挑戦してきた成果が結実した公演だった。トランペットとチェロの珍しい奏法を提示する世界初演作品が3人の邦人作曲家により披露されるという点も貴重だった。さらに若手作曲家にも初演作品を発表する機会となり、後進の育成にも意欲を感じる演奏会だった。

【演劇部門】（エンターテインメント賞）

演劇組織KIMYO「ゴスン」

●10月2日（月）～4日（水）、6日（金）～9日（月）、11日（水）～15日（日）　●ささしまスタジオ

明快なストーリーを、セリフ回しや殺陣のスピードで魅せる優れたエンターテインメント作品として昇華した。小さな舞台を上手く使い、臨場感溢れる舞台空間を演出したが、より大きな会場でこそ活かされる力強さを感じる公演だった。演劇だからこそ採り上げることができるセンシティブなテーマを観客に提示したことを高く評価する一方で、深い意味を込めた言葉選びをする丁寧な劇作に期待したい。

【演劇部門】（空間演出賞）

廃墟文藝部 第八回本公演「4047」

●11月17日（金）～19日（日）　●愛知県芸術劇場小ホール

人間の未来を描いたSFファンタジーの世界を、よく練られた緻密な脚本で表現し、観客を引き込んだ。シンプルな舞台美術と計算された照明などにより独自の空間をつくりあげ、時間軸を巧みに表現する演出が光った。演劇で表現することが難しいテーマを採り上げる意欲的な作品であるからこそ、より多くの観客が鑑賞しやすい脚本、演出に努め、共感につながる工夫を期待したい。

【舞踊部門】（HOPE賞）

名古屋市芸術奨励賞受賞記念公演 石原弘恵率いるダンスグループSOVaC「Alstroemeria～my:self」

●10月25日（水）　●千種文化小劇場

若手ダンスグループを起用し、活動を発展させたいとの意欲を強く感じる舞台だった。石原のソロはよく鍛錬されており、神秘性をまとう圧巻のものだった。また、ハンドパンの生演奏によるエキゾチックな音色とリズムが、花言葉をテーマとするダンスを引き立てたことも新鮮だった。今後、石原の指導で若手がさらに実力を伸ばし、レベルの高い舞踊を披露してくれることを期待したい。

【伝統芸能部門】（技芸賞）

玉城流扇寿会琉球舞踊第二回 山川昭子独演会「舞～時代を嬰る」

●10月15日（日）　●芸術創造センター

日頃の鍛錬の成果に裏打ちされた表現力が遺憾なく発揮された完成度の高い舞踊で、情緒たっぷりの舞台をつくり上げ、観客を魅了した。素晴らしい地謡が舞踊を魅力的に引き立て、古典舞踊、雑踊り、創作舞踊のいずれも見応えがあった。公演全体を流れるようにつなぐ構成が望まれたが、名古屋において正統派の琉球舞踊が確実に継承されていることが伝わり、さらに発展を目指す意志を強く感じる公演だった。

#zoom up
ズーム・アップ

株式会社コノハ美術 代表

池田ちか（いけだ）さん

アートの仕事、アートの現場が天職になる

愛知県では国際芸術祭「あいち」の影響もあってか、美術系大学における地域連携や企業とのコラボレーション企画などの新しい試みが進んでいる。それにより、アートが担う社会的な役割の重要性が広く認識されるようになりつつある。

一般的には美術の仕事＝創作活動と考えがちだが、作品を創造すること以外にも美術の仕事は存在する。展覧会や美術イベントを企画する池田ちかさんの仕事はその好例といえるだろう。池田さんに自分にしか出来ない仕事、自分にしかない価値とは何か、お話を伺った。

（聞き手：鈴木敏春）

「美術」との出会い

中学生時代、美術部にて（一番右が池田さん）

私は名古屋市に生まれ、大府市で育ちました。幼少期は特別絵を描くことが好き、というほどでもなかったのですが、大府中学に通っていた時に、友人に誘われてなんとなく美術部に入りました。その時の顧問が版画家の森岡完介先生だったんです。その出会いはそれはもう印象的で、森岡先生に美術の面白さを植えつけられたと思います（笑）

高校では剣道部に所属し、美術とは深く関わっていなかったものの、大学は芸術系の道に進みたいと考えました。そこで、多摩美術大学美術学部芸術学科プロデュースコースへ進学し、美術評論家の東野芳明先生のゼミを選びました。東野先生は「真面目に授業に出るくらいなら、銀座の画廊を全て回って来い」などと言うようなユニークな方でした。授業も美術のジャンルに留まらず、人類学などさまざまな分野の講師を招くなど興味深いもので、非常に影響を受けました。他にも菅木志雄先生や李禹煥（リ ウファン）先生など、当時の美術の最先端を行く先生方が多数在籍しており、そうした先生方のもとで学べたことはとても刺激になりましたね。

大学の芸術祭

導かれるように進んだ美術の世界

レントゲン藝術研究所

予備校時代にお世話になった、小西信之先生の紹介で、大学生の頃にアトリエ出版社というところで編集アシスタントのアルバイトをしていました。それが縁となり大学卒業後に、アトリエ出版社に勤めていたキュレーターの西原珉さんから、「レントゲン藝術研究所（以下レントゲン）でスタッフを募集しているから行ってみたら」と勧められたことがきっかけで、働くことになりました。東京の大田区にあったレントゲンは当時の現代美術のアートシーンを引率していた、日本で最初の本格的なオルタナティブギャラリーです。若手作家の登竜門的な存在だったレントゲンでは、村上隆さんの展覧会や会田誠さんのデビュー展覧会に携わり、デレクションなどを学びました。

レントゲンが1996年に青山に移転するタイミングで退職し、その時に知人に紹介されたのが編集工学研究所の松岡正剛さんでした。当時、松岡さんがプロデューサーとして関わっていた岡崎市美術博物館が開館するということで、私も編集工学研究所のスタッフとして、東京と愛知を行ったり来たりしていました。その際に関係者の方から「愛知県出身で、学芸員の資格もあるならこっちへ来ないか」とお誘いいただき、愛知へ帰郷し、岡崎市美術博物館の学芸員として働くことになりました。

転換期となったのは、岡崎市内にあるノブギャラリーでア

『天使と天女-天界からのメッセージ』展（岡崎市美術博物館）
学芸員時代の池田さん（左）

ートディレクターをしていた内藤美和さんとの出会いです。もともと面識はあったのですが、個人的な接点はなかった内藤さんとお話するうちに意気投合。現代美術に対するスタンスがよく似ていることがわかり、気がついたら「一緒に仕事をしましょう」という話になっていました。

そこで、2年程勤めた岡崎市美術博物館を退職し、内藤さんと2人で1999年に現代美術に関するコーディネート＆プランニング事務所としてオフィス・マッチング・モウル（以下マッチングモウル）を創業、2001年に法人化しました。今ふり返ると、多くの方との出会いがきっかけで、導かれるように進んできたなと思います。

オフィス・マッチング・モウル

佐久島での企画・運営

今では現代アートの島として名高い佐久島ですが、少子高齢化による人口減少が進む中、始まったのが「アートによる島おこし」でした。マッチングモウルは2001年以来、深くこの取り組みに関わってきました。島にアート作品を設置することに留まらず、島の魅力も同時に発信すべく始まったプロジェクトが「三河・佐久島アートプラン21」です。2004年に制作された南川祐輝さんの『おひるねハウス』はゆったりとした自然に向き合う人々の営みを示す代表的な作品で、ご存じの方も多いのではないでしょうか。

『おひるねハウス』2004（2023年再制作）
設計:南川祐輝／
撮影:尾崎芳弘［DARUMA］

以降、佐久島での企画事業に20年程関わり、もはや佐久島は第二の実家のような感覚です。

2001年当時に小学生だった島の子どもたちが、20年の時を経て大人になり、皆と一緒にあいちトリエンナーレ（現：国際芸術祭「あいち」）に行く機会がありました。美術館もギャラリーもない島の子どもたちが大人になり、作家や作品の話ができることが感慨深く、嬉しかったですね。私はもともと子どもと接することが好きでしたし、子どもたちの成長をアートを通して見届けることが新たな場所でもできたらと考え、2020年に株式会社コノハ美術（以下コノハ美術）を岡崎市に設立しました。

コノハ美術の設立

コノハ美術はマッチングモウルから独立したかたちで設立しました。コノハの名前は愛知県の県鳥のコノハズクと、四季の移ろいを感じることのできる木の葉、富士山本宮浅間大社に祀られる木花之佐久夜毘売（コノハナサクヤヒメ）にちなみました。木花之佐久夜毘売は山の神である大山津見神（オオヤマツミノカミ）の娘神です。マッチングモウルでは海の佐久島を中心に展開していたので、山を中心に「子どもと自然とアート」をテーマに「子どもも大人も楽しめる」を目指した活動をしています。山は川を通じて海につながっています。山からの豊かな栄養が海に恵みをもたらすんですね。コノハ美術では子ども向けのアート教室や環境とアートを結びつけたワークショップなど、岡崎市の額田地域の森林からの間伐材といった自然素材を使用した作品づくりを通して、子どもたちの豊かな感性を育くんでいきたいと考えています。

標本箱ワークショップ（2023年）

最近はコロナの影響で、子どもが野外で遊び、自然に触れる機会が減ったように感じます。身体を動かし、五感を刺激することで、空間認知能力が養われます。それが、豊かな発想力や思考力につながりますから、美術だけではなく運動を取り入れたりさまざまなジャンルと組み合わせながらアートに親しんでもらいたいと思います。

今後は、年齢や障がいの有無、性別、国籍を超えてアートを楽しむ場をつくっていけたら嬉しいですね。現在、高齢者を対象にしたアートのワークショップを企画しており、2024年4月から試験的に開催する予定です。

国際芸術祭「あいち」2022では展示会場である常滑で地元若手陶芸家と作品制作をしたり、西尾市の国際芸術祭地域展開事業の会場運営を地元スタッフと行うなど、地域とアートをつなぐ活動に関わる池田さん。今後の活動にも注目です。

令和6年3月25日発行（年4回6・9・12・3月の25日発行）通巻409号　編集発行／公益財団法人　名古屋市文化振興事業団　〒460-0008　名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP https://www.bunka758.or.jp/

Information

なごや文化は寄附でもつ

NAGOYA Culture Fund

名古屋市文化基金

支援・育成事業

― 市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成 ―

参加・体験事業

―市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施 ―

鑑賞事業

―― 優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供 ――

市民文化の情報発信

― 情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信 ―

皆さまからいただいた寄附金を活用し、なごや文化創造のための様々な事業を展開しています！

名古屋市文化基金の詳細および寄附のお申込みはこちら

ご寄附に関するお問い合わせ

名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL 052-249-9390

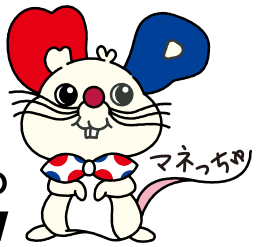
頼もしい味方をお探しですか？

集客・販促プランナー　アートディレクター　印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社　TEL(052)331-8881
〒460-0021　名古屋市中区平和2-9-12　http://www.kp-c.co.jp

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容
①舞台の企画・制作マネージメント
②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング
④舞台・イベントの運営



MANAGEMENT PRO
株式会社マネージメント・プロ

〒461-0004　名古屋市東区葵2-11-22　アバンテージ葵ビル301
TEL:(052)508-5095　FAX:(052)508-5097　Web:www.mane-pro.com　E-mail:mane-pro@mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行
※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

デザイン・印刷／駒田印刷株式会社